

3. 中心市街地の活性化の目標

[1] 中心市街地活性化の目標

本計画では、中心市街地活性化の基本方針に基づき、次の3つを中心市街地活性化の目標として設定する。

- | |
|-----------------------|
| 目標1：人々が活発に交流しにぎわうまち |
| 目標2：城下町の魅力があふれるまち |
| 目標3：誰もが気軽に訪れることができるまち |

[2] 計画期間の考え方

本計画の計画期間は、平成28年度には熊本駅西土地地区画整理事業が完了予定であるなど熊本駅周辺の整備事業等の進捗及びその効果等を考慮し、平成24年4月から平成29年3月までの5年とする。

[3] 数値目標設定の考え方

本計画で設定した中心市街地活性化の目標の達成状況を的確に把握できるよう、定期的なフォローアップに使用できる指標とすることを前提に、数値目標を設定し、目標の達成状況を管理する。

目標 1

「人々が活発に交流しにぎわうまち」に関する数値目標

(1) 指標の考え方

「人々が活発に交流しにぎわうまち」に関しての指標としては、中心市街地の賑わいを把握するものとして適切であり、来街者を定量的に測定することが可能である商店街歩行者・自転車通行量（※以下、「歩行者通行量」という。）により、施策の成果を計るものとする。

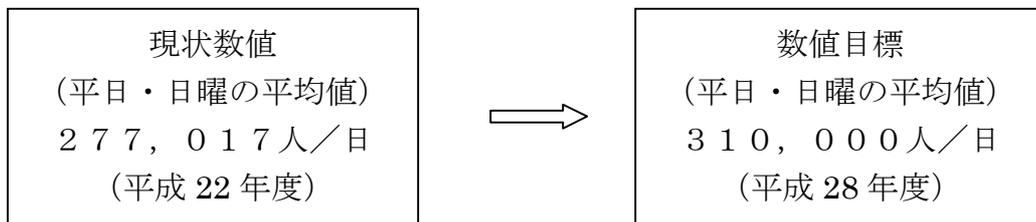
※調査対象：計測地点 28 か所における歩行者及び自転車

(中学生程度以上) 通行量の 2 日間（金曜日と日曜日）の平均値

※調査主体：熊本市、熊本商工会議所

(2) 具体的な数値目標の考え方

- 1) 中心市街地における計測地点 28 か所の歩行者通行量 2 日間（平日と日曜）の平均値
中心商店街の機能の回復や新市街アーケードの路面改修、及び桜町周辺地区の市街地再開発事業等による核機能の強化とその波及効果による回遊性の向上等を見込み、5 年後の歩行者通行量の目標は、1 期計画策定時の数値である平成 18 年度の約 310,000 人まで引き上げることとする。



2) 数値目標設定の考え方

歩行者通行量の目標設定にあたっては、下記①のトレンドを踏まえて、②～⑦の各々の項目ごとの施策等の効果を積算して設定するものとする。

- ①直近のトレンドを踏まえた平成 28 年度の歩行者通行量
- ②「中心市街地空き店舗等総合活用事業」による増加
- ③通町筋・桜町周辺地区における市街地再開発事業等による歩行者通行量の増加
- ④熊本駅周辺地区における市街地再開発事業等による増加
- ⑤熊本城入園者数増により見込まれる増加
- ⑥「桜の馬場 城彩苑」入場者数により見込まれる増加
- ⑦熊本博物館入館者数増により見込まれる増加

3章 中心市街地の活性化の目標

①直近のトレンドを踏まえた平成 28 年度の歩行者通行量 277,017 人

熊本市では、延床面積 1 万㎡を超える大規模集客施設等の立地規制を行うなど、中心市街地のまちづくりに取り組んで来たため、郊外への大型店の出店や集客施設の移転は概ね平成 19 年度までで落ち着きを見せ、以後は、中心市街地とは業態を異にする中小型店の出店があるにとどまっている。

また、経済状況が大きく変動する中で、熊本県全体の商品販売額が落ち込みを見せており、中心市街地でも同様の傾向にあるものの、1 期計画に掲載の熊本城本丸御殿復元整備事業による熊本城入園者の増加 (H19～)、下通アーケード改修事業による歩行者空間の環境整備 (H21～)、くらし・にぎわい再生事業 (熊本駅周辺地区) による医療専門学校の開校 (H21～) 等のハード整備や商店街との協働による賑わい創出を目的としたイベントの開催等ソフト事業の取り組みから、周辺の歩行者通行量が前年度比でプラスに転じるなど、効果の発現が平成 19 年度から徐々に見られている。このようなことから、中心市街地の歩行者通行量は、平成 22 年度の調査結果について、5 日間連続で最高気温が 36 度を超える猛暑日が続く、外出が抑制される中で実施され、測定結果に大きく影響したことを考慮してトレンドから除外すると、平日、日曜の平均では減少しているものの、個別には平日は増加、日曜はほぼ横ばいで推移している傾向が見られる。

また、熊本市が毎年実施している「市政に関するアンケート調査」(平成 23 年 2 月実施)でも、「中心市街地ににぎわいがあると感じるか」との問いに対して、「とても感じる」、「やや感じる」を合わせた割合が前回調査と比較すると、0.3 ポイント増加しており、市民の肌感覚においてもこの傾向が裏づけられることから、中心市街地の歩行者通行量は、今後も一定の範囲内で変動するものと考えられるため、トレンドとしては平成 22 年度の値を底値と考慮して「横ばい」として設定する。【表 1、表 2 参照】

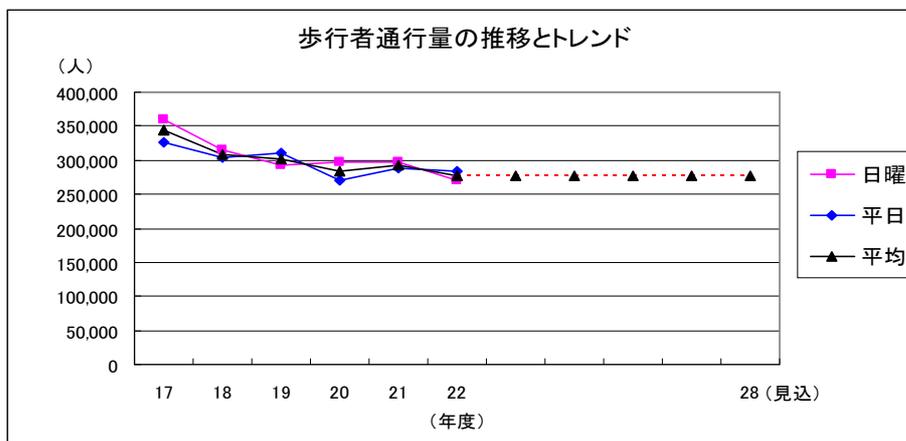
以上のことから、トレンドを踏まえた平成 28 年度の歩行者通行量は、平成 22 年度の歩行者通行量 277,017 人とする。

【表 1】

中心市街地商店街 28 地点歩行者通行量の推移 (日曜・平日・平均)

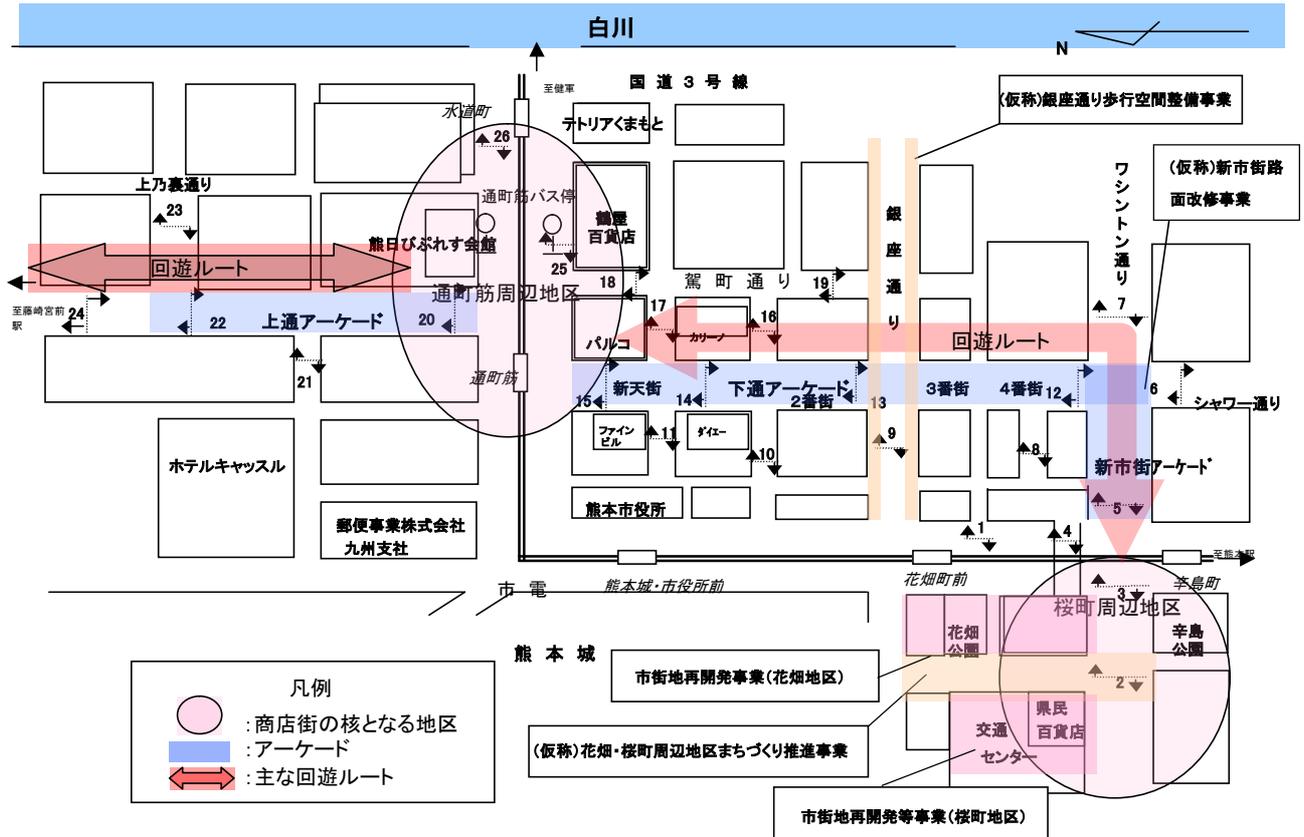
年度	17	18	19	20	21	22
日曜	360,683	314,617	293,349	297,815	296,332	270,872
平日	326,766	304,145	310,992	271,356	289,175	283,162
平均	343,725	309,381	302,171	284,586	292,753	277,017

【表 2】



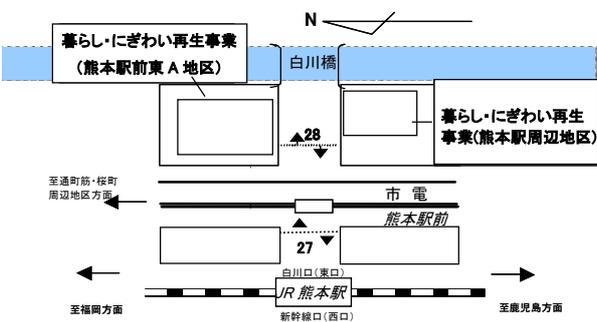
【図1】商店街歩行者通行量調査地点図

○通町筋・桜町周辺地区



※本市の中心商店街は下通商店街を中央に挟んで、北側に上通商店街、南側にサンロード新市街が連なっており、下通商店街の北側にある通町筋周辺地区、新市街の西側にある桜町周辺地区を2つの核として、各々にバス停、市電の電停等があり、公共交通機関利用者を中心に回遊する構造になっている。

○熊本駅前



※なお、九州新幹線全線開業に伴い、JR熊本駅西側に新たに新幹線口(西口)が開設されており、駅周辺の通行量を補完する意味から、通行量調査における28地点とは別に、新幹線口の推移についても把握することとする。

No.	町名(通名)	調査地点
1	交通センター	熊本ファミリー銀行花畑支店前(スクランブル交差点)
2	県民百貨店	県民百貨店~旧産業文化会館(スクランブル交差点)
3	新市街	旧産業文化会館~新市街(スクランブル交差点)
4	新市街	幸島公園地下駐車場連絡通路
5	新市街	パチンコプラザ前
6	シャワー通り	新市街郵便局前
7	ワシントン通り	皆越洋服店前
8	ブルスコート	モアーズIIビル前
9	銀座通り	南日本銀行熊本営業部前
10	城見通り	南酒店前
11	市庁舎通り	山小屋ビル前
12	下通	カリノセカンド前
13	下通	三国屋前
14	下通	ダイエー・櫻井總本店前
15	下通	ファインビル前
16	安政町	カリノ下通 南側入口横
17	下通	カリノ下通 北側入口横
18	駕町通り	鶴屋本館西側入口横
19	駕町通り	ハッピービル前
20	上通	びぶれす熊日会館前
21	上通	長崎書店横
22	上通	第十美創ビル前
23	上通	坂梨カメラ前
24	上通	並木坂(園田屋前)
25	通町筋	鶴屋本館西口入口横
26	水道町	肥後銀行水道町支店前
27	熊本駅前通り	熊本駅前広場東口出口
28	熊本駅前通り	森都心プラザ前

3章 中心市街地の活性化の目標

②「中心市街地空き店舗等総合活用事業」による増加 3,000 人

平成 22 年度に熊本市が行った空き店舗調査によれば、平成 20 年度まで 5%台にとどまっていた中心市街地商店街全体の空き店舗率（1 階部）は、11.4%と初めて 10%を超える結果となった。中でも空き店舗率が最も高かったのはシャワー通り商店街の 32.4%で、前年度に比べて約 2 倍に増加、歩行者通行量調査（No. 6 地点）の結果においても前年比 25%減となるなど、空き店舗対策が急務となっている。

そこで、平成 23 年度に実施する中心市街地（上通、下通、新市街他）の商業ビル実態調査の結果を踏まえ、空き店舗等を活用した中心市街地の魅力や賑わいを創出するための事業を実施することとしている。この事業の対象となる商店街の入り店舗数（1 階部）は、328 店舗（平成 22 年度）であり、歩行者通行量調査地点（No. 5～19、21～24）の歩行者通行量 208,874 人を店舗数で割ると 1 店舗あたり約 600 人の通行量が見込めることになる。

また、当該計画期間中の空き店舗対策対象店舗数として 5 店舗を見込んでいることから、3,000 人の歩行者通行量の増加が見込まれる。

【積算】

$$208,874 \text{ 人（平成 22 年度中心市街地商店街 19 地点の通行量）} \div 328 \times 5 = 3,184 \div 3,000 \text{ 人}$$

※中心市街地商店街 19 地点（図 1 通行量調査地点図：No. 5～19、21～24）

③通町筋・桜町周辺地区における市街地再開発事業等による歩行者通行量の増加

15,300 人

i) 市街地再開発事業（花畑地区）の核機能向上による増加 13,500 人

ii) （仮称）銀座通り歩行空間整備事業による増加 800 人

iii) 熊本市上通自転車駐車場新設による増加 1,000 人

i) 市街地再開発事業（花畑地区）による核機能の向上による増加 13,500 人

現在進めている市街地再開発事業（花畑地区）は、商業、業務、文化ホール等集客力のある施設整備を行うとともに、開発の地区面積においても、当初は 0.9ha を予定していたが、その後同一街区の北側を含め 1.7ha に拡大したところである。

市街地再開発事業（花畑地区）により桜町周辺地区の核機能は従来以上に向上し、格段の効果を発揮することが想定される。

平成 14 年度に通町筋周辺地区で実施された再開発事業により、再開発ビル周辺の通行量調査 2 地点では、平成 15 年度の歩行者通行量が前回（平成 12 年度）と比較して 13%増加【表 3 参照】していることから、市街地再開発事業（花畑地区）についても同様に 13%の増加を見込む。

また、今回通町筋周辺から花畑、桜町両再開発事業の地区に直結する新市街アーケードや銀座通りでは、路面の改修や歩行者空間の整備を予定している。

3章 中心市街地の活性化の目標

本市においては、上通から下通、サンロード新市街を中心に回遊する傾向があり、加えて下通から花畑再開発事業の地区へは、銀座通りや西銀座通りを経て回遊することも多いことから、花畑の再開発事業により核機能が向上すれば、中心商店街全体の面的回遊性が高まることが見込まれたため、通町筋・桜町周辺地区主要 12 地点にも同様の効果が及ぶものと推定される。

したがって、平成 28 年度の通町筋・桜町周辺地区主要 12 地点の歩行者通行量は、平成 22 年度の歩行者通行量の 13%増に当たる約 13,500 人の増加が見込まれる。

【表 3】

平成14年度 通町地区再開発事業により効果のあった2地点の通行量

(単位:人/日)

調査地点	平成12年度	平成15年度
20 びふれす熊日会館前	35,923	36,831
25 テトリアくまもと前	5,773	10,295
平日・日曜合計通行量の平均値	41,696	47,126
アップ率	—	13.0%

【積算】

104,489 人 (平成 22 年度通町筋・桜町周辺地区主要 12 地点の歩行者通行量) × 13%
= 13,583 人 ≒ 13,500 人

※通町筋・桜町周辺地区主要 12 地点 (図 1 通行量調査地点図 : NO. 1~10、12~13)

ii) (仮称) 銀座通り歩行空間整備事業による増加 800 人

下通アーケードから花畑、桜町両再開発事業の区域につながる銀座通りについては、自転車駐輪スペースの廃止等による歩行空間の拡充や傷んだ歩道の改修を行うなど、ゆったりと安心して回遊できる歩行者空間の環境整備を実施することとしている。

平成 19 年度に行われた駕町通りの整備 (平成 19 年 3 月完成) では、歩行者通行量調査地点 (NO. 13) において、平成 22 年度の通行量が平成 18 年度との比較で約 13.5% 増加している (表 4 参照)。よって、銀座通りについても同様の効果が及ぶものと推定されるため、銀座通りの歩行者通行量調査地点 (NO. 9) の通行量は、平成 22 年度の 13.5%増に当たる 800 人の増加を見込む。

【表 4】

駕町通りの整備による効果

調査場所	平成 18 年度	平成 22 年度	増加率
No. 19 駕町通り (人/日)	5,652	6,415	13.50%

【積算】

6,135 人 (平成 22 年度通町筋周辺地区 NO. 9 地点の歩行者通行量) × 0.135 = 828
≒ 800 人

※通町筋周辺地区 1 地点 (図 1 通行量調査地点図 : NO. 9)

3章 中心市街地の活性化の目標

iii) 熊本市上通自転車駐車場新設による増加 1,000 人

「自転車でお出かけしたくなるまちづくり」を基本理念として、平成 23 年度に策定した「第 2 次熊本市自転車利用環境整備基本計画」に基づき、自転車が利用しやすい環境や快適な走行空間を整備することとしている。この計画では、自転車利用者は来街頻度が高く、また一定の消費もあることから、街のにぎわいを支えているとしている。また、「熊本市駐輪場対策調査（平成 18 年 2 月）」では、中心市街地の自転車利用者から自転車駐車場整備に関する意見が多くあがっていることから、利用者ニーズに応え自転車駐車場を整備すれば、利用者をより中心部へ呼び込むことに繋がると考えられる。このようなことから自転車駐車場の整備や民間事業者が行う自転車駐車場の整備費用を補助するなど、自転車利用者の利便性向上と放置自転車の解消に取り組んでおり、その一環として、上通東側に 650 台収容できる自転車駐車場を新設することとしている。

平成 22 年度調査による上通ゾーンの放置自転車数は 145 台であり、これは新設する駐車場で十分解消されることが見込まれるため、この分を除き新たに駐車可能となる台数が 505 台であること、新設駐車場はアーケードに近接していることから、利用者が中心市街地の通行量調査地点のいずれかの地点を往復するものとして、少なくとも利用者 $505 \text{ 人} \times 2 \text{ 回} = 1,010 \approx 1,000$ 人の歩行者通行量の増加を見込む。

④熊本駅周辺地区における市街地再開発事業等による増加 10,400 人

i) 「熊本駅前東 A 地区市街地再開発事業」等による増加 400 人

ii) 「熊本駅前東 A 地区市街地再開発事業」及び「暮らし・にぎわい再生事業（熊本駅前東 A 地区）」等による増加 3,000 人

iii) 「熊本駅前東 A 地区市街地再開発事業」による共同住宅整備による増加 700 人

iv) 「暮らし・にぎわい再生事業（駅周辺地区）」による増加 200 人

v) 熊本合同庁舎整備等事業による増加 4,100 人

vi) 熊本駅西土地地区画整理事業による増加 2,000 人

i) 「熊本駅前東 A 地区市街地再開発事業」等による増加 400 人

「熊本駅前東 A 地区市街地再開発事業」及び「暮らし・にぎわい再生事業（熊本駅前東 A 地区）」により情報交流施設（A 棟）が整備され、その 1、2 階部分は商業、業務施設となっている。また同一敷地内の B 棟（共同住宅）の 1、2 部分及び C 棟は、商業・業務施設が予定されている。

平成 14 年度に通町筋周辺地区で実施された再開発事業により、再開発ビル周辺の通行量調査 2 地点では、平成 15 年度の歩行者通行量が前回（平成 12 年度）と比較して 13% 増加【表 3 参照】していることから、今回の再開発事業等により、熊本駅周辺地区 2 地点にも同様の効果が及ぶものと見込まれる。したがって、平成 28 年度熊本駅周辺地区 2 地点の歩行者通行量は、平成 22 年度の歩行者通行量の 13% 増に当たる約 400 人の増加を見込むものとする。

3章 中心市街地の活性化の目標

【積算】

3,485人（平成22年度熊本駅周辺地区2地点の歩行者通行量）×13%＝453人
 ≒400人

※熊本駅周辺地区2地点（図1通行量調査地点図：No.27,28）

- ii) 「熊本駅前東A地区市街地再開発事業」及び「暮らし・にぎわい再生事業（熊本駅前東A地区）」等による増加 **3,000人**

「熊本駅前東A地区市街地再開発事業」及び「暮らし・にぎわい再生事業（熊本駅前東A地区）」により情報交流施設が整備され、平成23年10月1日にオープンしたところである。当施設の来館者数については、約1,500人/日（表5参照）を想定していることから、1,500人が熊本駅前にある2地点（図1通行量調査地点：No.27、No.28）のいずれかの1地点を往復するとして、1,500人×2回＝3,000人の増加を見込む。

【表5】

くまもと森都心プラザ利用者予測

部門	年間利用者数(人)	資料
プラザ図書館	240,000	市立図書館実績を参考に推計
ビジネス支援センター	6,000	他都市類似施設事例を参考に推計
観光・郷土情報センター	110,000	他都市類似施設事例を参考に推計
ホール等	150,000	産文会館実績を参考に推計
計	506,000	—
(人/日)	1,500	開会館予定日数：339日

- iii) 「熊本駅前東A地区市街地再開発事業」による共同住宅整備による増加 **700人**

今回建設されているB棟（共同住宅）により、225戸が供給されるもので、部屋タイプ別で、2LDK（33戸）・3LDK（102戸）・4LDK（90戸）となっている。

平成17年の国勢調査（表26）「住居の種類、住宅の所有関係別居住密度」によると、熊本市の1世帯あたりの人員は、住宅に住む一般世帯で主世帯（持ち家）の場合は、2.87人であり、当住宅はファミリー向けの戸数が多くなっていることから225戸×2.87人＝645人が新たな居住者となる。この居住者の外出時の移動手段として熊本都市圏都市交通アクションプログラム（熊本都市圏交通円滑化総合対策部会 H15.6）による中心市街地における自動車の分担率43.2%を考慮したうえで、熊本駅前にある2地点（図1通行量調査地点：No.27、No.28）のいずれかの1地点を外出で往復するとして、居住者645人×（100%－43.2%）×2回＝732≒700人の歩行者通行量の増加を見込む。

- iv) 「暮らし・にぎわい再生事業（駅周辺地区）」による増加 **200人**

熊本駅前に新たに医療施設が整備され、施設職員として100人の雇用（見込み）を予定している。このことから100人が熊本駅前にある2地点（図1通行量調査地点：No.27、No.28）のいずれかの1地点を往復するとして100人×2回＝200人の歩行者通行量の増加を見込む。

3章 中心市街地の活性化の目標

v) 熊本合同庁舎整備等事業による増加 4,100 人

熊本合同庁舎B棟整備事業業務要求水準書によると、B棟（平成24年秋着工）完成時には職員、一般来客者を含めA、B棟の合計で2,555人/日の入居人員（職員：2,075人、来客者：480人）が想定されている。この入居人員全て（2,555人）の交通手段として市電利用に加えて、来客者（480人）の自家用車利用を考慮したうえで、入居人員が熊本駅前にある2地点（図1通行量調査地点：No.27、No.28）のいずれかの1地点を往復するとして4,100人の歩行者通行量の増加を見込む。

このとき、各交通手段の利用率については、平成10年の「熊本市中心市街地来街者意識調査」をもとに、中心部へ訪れる人の来街手段として、市電の割合は13%、自家用車の割合は27.6%として推計する。

【積算】

$$\{2,075 \text{ 人} \times (100\% - 13\%) + 480 \text{ 人} \times (100\% - 13\% - 27.6\%)\} \times 2 \text{ 回} = 4,180 \\ \div 4,100 \text{ 人}$$

vi) 熊本駅西土地区画整理事業による増加 2,000 人

熊本駅西地区は、建物が密集し道路も狭く公園等の施設が不足しているとともに、駅に隣接しているという特性が活かされていないことから、住民が安心して住み続けられるよう環境に配慮したまちをつくるため、土地区画整理事業により道路、公園等の整備を行い、宅地の利用増進を図っている。

また、西口駅前広場を核として交通結節機能を高めるとともに商業を活性化させ、活気のある人にやさしく住みよいまちづくりを行っている。

熊本都市計画事業熊本駅西土地区画整理事業の事業計画書による当事業の区画整理面積は、18.1haで、整備完了後の人口は1ha当たり102人になると推計されている。このことから $102 \text{ 人} \times 18.1 = 1,846 \text{ 人}$ が居住することとなる。この居住者の外出時の移動手段として熊本都市圏都市交通アクションプログラム（熊本都市圏交通円滑化総合対策部会 H15.6）による中心市街地における自動車の分担率43.2%を考慮したうえで、熊本駅前にある2地点（図1通行量調査地点：No.27、No.28）のいずれかの1地点を外出で往復するとして、居住者 $1,846 \text{ 人} \times (100\% - 43.2\%) \times 2 \text{ 回} = 2,097 \text{ 人} \div 2,000 \text{ 人}$ の増加を見込む。

⑤熊本城入園者数増により見込まれる増加 1,200 人

平成28年度の熊本城の入園者数は200万人を予定しており、平成22年度より約56万人の増加が見込まれている。平成23年3月オープンした「桜の馬場 城彩苑」との相乗効果、熊本城と連携した商店街のイベントの実施やレンタサイクル事業、地元まちづくりの会の観光ツアーなど多様な取り組みにより、熊本城を中心とした回遊性の向上が図られるものと考えられる。

熊本市が実施した「熊本城及び桜の馬場城彩苑観光実態調査（平成23年4月29日から5月8日の連休中に実施）」によれば、熊本城入園者数の約4割が「中心市街地へ行く・行った」と答えている。（表6参照）

よって、中心市街地行く人は $560,000 \text{ 人} / \text{年} \times 0.4 \div 365 \text{ 日} = 613 \text{ 人} / \text{日}$ である。この

3章 中心市街地の活性化の目標

ことから中心市街地の通行量調査地点のいずれかの地点を往復するとして $613 \text{ 人} \times 2 \text{ 回} = 1,226 \div 1,200$ 人の通行量の増加を見込む。

【表 6】

「中心市街地へ行くか・行ったか」

調査場所	行く・行った	全数	割合
熊本城	392	1,040	37.69%

(資料) 熊本城及び桜の馬場城彩苑観光実態調査

⑥「桜の馬場 城彩苑」入場者数により見込まれる増加 600 人

平成 23 年 3 月に熊本城域内に観光文化交流施設「桜の馬場 城彩苑」が新たにオープンした。城彩苑には、飲食・物販の「桜の小路」と熊本城の歴史や文化を体感する「湧々座」がメイン施設としてあり、市民はもとより県内外の観光客で連日にぎわいをみせており、開業から約 7 ヶ月で年間入場者数の目標である 100 万人に達した。

熊本市が行った「熊本城及び桜の馬場城彩苑観光実態調査（平成 23 年 4 月 29 日から 5 月 8 日の連休中に実施）」によれば、(⑤との重複を除くため) 城彩苑入場者数のうち「熊本城へ行かない」と答えた人の割合を見ると 24% である。また、城彩苑入場者数の約 5 割が「中心市街地へ行く・行った」と答えている。(表 7 参照)

よって、熊本城へ行かない城彩苑入場者のうちで中心市街地へ行く人は、入場者目標数 $1,000,000 \text{ 人} / \text{年} \times 0.24 \div 365 \text{ 日} \times 0.5 = 328 \text{ 人} / \text{日}$ である。このことから中心市街地の通行量調査地点のいずれかの地点を往復するとして $328 \text{ 人} \times 2 \text{ 回} = 656 \div 600$ 人の通行量の増加を見込む。

【表 7】

「熊本城へ行く・行ったか」

調査場所	行かない	全数	割合
城彩苑	243	1,033	23.52%

「中心市街地へ行くか・行ったか」

調査場所	行く・行った	全数	割合
城彩苑	478	1,033	46.27%

(資料) 熊本城及び桜の馬場城彩苑観光実態調査

⑦熊本博物館入館者数増により見込まれる増加 300 人

平成 23 年 3 月にリニューアルオープンしたプラネタリウムが人気で、4 から 8 月の 5 ヶ月間の観覧者数は前年同期で 2 倍を超えている。約 9,500 個の星を鮮明に再現、デジタル投影機の導入で「はやぶさ」の旅を描いた新番組等を上映している。また、プラネタリウムを除く入館者数は、同じく前年同月比で約 1 割減となっているため、今後は、展示資料や内容を含めたリニューアルを行うことで入館者増を目指している。

プラネタリウムを含めた博物館のリニューアルの効果については、博物館入館者数が

3章 中心市街地の活性化の目標

ほぼ一定していること、(1)プラネタリウムを前年同期からの推定値（平成22年9月から改修のため）の2倍、(2)その他の入館者数を前年同期からの推定値の9割分の2倍と推計し、合計で345人/日増を見込む。

※入館者数等は、熊本博物館提供

【積算】

(1) リニューアル後のプラネタリウム観覧者数

$$22,148 \text{ 人 (平成22年度プラネタリウム観覧者数: 4~8月)} \div 5 \text{ 月} \times 12 \text{ 月} \times 2 \\ = 106,310 \text{ 人}$$

(2) リニューアル後の博物館（プラネタリウム観覧者数を除く）の入館者数

$$18,209 \text{ 人 (プラネタリウム観覧者数を除く平成22年度入館者数: 4~8月)} \times 0.9 \\ \div 5 \text{ 月} \times 12 \text{ 月} \times 2 = 78,663 \text{ 人}$$

(3) リニューアル後の博物館入館者数（全館）

$$(1) + (2) = 184,973 \text{ 人}$$

(4) 平成22年度入館者数（全館）79,812人

(5) リニューアルによる入館者数（全館）の増加見込み数の日量

$$((3) - (4)) \div 305 \text{ 日 (開館予定日数)} \doteq 345 \text{ 人/日}$$

また、同じ熊本城域内の施設である城彩苑での実態調査（表7参照）により、中心市街地へ行く人は入場者の約5割であることから、同様に博物館入館者の5割が中心市街地へ行き、通行量調査地点のいずれかの地点を往復するとして $345 \text{ 人/日} \times 0.5 \times 2 \text{ 回} = 345 \doteq 300 \text{ 人/日}$ の通行量の増加を見込む。

【中心市街地28地点における歩行者通行量目標値の積算】

①平成28年度の歩行者通行量見込み（トレンドは、平成22年度並で推移。）

277,017人

②「中心市街地空き店舗等総合活用事業」による増加

3,000人

③通町筋・桜町周辺地区における市街地再開発事業等による歩行者通行量の増加

15,300人

④熊本駅周辺地区における市街地再開発事業等による増加

10,400人

⑤熊本城入園者数増により見込まれる増加

1,200人

⑥「桜の馬場 城彩苑」入場者数増により見込まれる増加

600人

⑦熊本博物館入館者数増により見込まれる増加

300人

$$\text{①} + \text{②} + \text{③} + \text{④} + \text{⑤} + \text{⑥} + \text{⑦} = 307,817 \text{ 人}$$

3章 中心市街地の活性化の目標

これらの積算の他に、「地域子育て支援拠点事業（ひろば型）」、「(仮称)上通3・4・5丁目アーケードECO改修事業」、「(仮称)下通新天街アーケード照明LED化及び路面改修事業」、「(仮称)中心市街地公衆無線LAN整備事業」、「ブランド化推進協力店事業」など様々な新たな取り組みを行うことにより、目標値は310,000人を見込む。

【表8】

中心市街地活性化基本計画目標1の積算表

調査地点番号	調査地点	平成22年度平日・日曜合計 平均値	① 歩行者通 行量(トレ ンド)	② 「中心市 街地空き 店舗等総 合活用事 業」による 増加分	③-1) 市街地再 開発事業 (花畑地 区)による 核機能の 向上によ る増加分	③-ii) (仮称)銀 座通り歩 行空間整 備事業に よる増加 分	③-iii) 熊本市上 通自転車 駐車場新 設による 増加分	④-1) 「熊本駅 前東A地 区市街地 再開発事 業」等に よる増加	④-ii) 「熊本駅 前東A地 区市街地 再開発事 業」及び 「暮らし・ にぎわい 再生事業 (熊本駅 前東A地 区)」等に よる増加
		a	b=a× 100%		c=a× 13%	d=a× 13.5%			
1	熊本ファミリー銀行花畑支店前(スクランブル交差点)	2,812	2,812		350				
2	県民百貨店～旧産業文化会館(スクランブル交差点)	4,921	4,921		640				
3	旧産業文化会館～新市街(スクランブル交差点)	10,821	10,821		1,400				
4	辛島公園地下駐車場連絡通路	4,744	4,744		600				
5	③-i) パチンコプラザ前	14,766	14,766		1,920				
6	通町筋・ 桜町周辺 地区主要 12地点	3,265	3,265		420				
7	新市街郵便局前	3,226	3,226		430				
8	皆越洋服店前	2,022	2,022		260				
9	モアーズIIビル前	6,135	6,135		790	800			
10	南日本銀行熊本営業部前	5,640	5,640		730				
12	南酒店前	20,065	20,065		2,600				
13	カリノセカンド前	25,972	25,972		3,360				
13	三国屋前	25,972	25,972		3,360				
	小計	104,489	104,489		13,500	800			
11	山小屋ビル前	4,369	4,369						
14	ダイエー・櫻井總本店前	25,572	25,572						
15	ファインビル前	31,828	31,828						
16	カリノ下通 南側入口横	6,063	6,063						
17	カリノ下通 北側入口横	13,196	13,196						
18	鶴屋本館西側入口横	11,334	11,334						
19	ハッピービル前	6,415	6,415						
20	びぶれす熊日会館前	29,644	29,644						
21	長崎書店横	3,416	3,416						
22	第十美創ビル前	15,952	15,952						
23	坂梨カメラ前	4,024	4,024						
24	並木坂(園田屋前)	5,514	5,514						
25	鶴屋本館北口入口	6,937	6,937						
26	肥後銀行水道町支店前	4,779	4,779						
	小計	169,043	169,043						
	通町筋・桜町周辺地区小計(1～26)	273,532	273,532	3,000	13,500	800	1,000		
27	④熊本駅 2地点	2,055	2,055						
28	熊本駅前広場東口出口	1,430	1,430						
28	森都心プラザ前	1,430	1,430						
	駅周辺地区小計(27～28)	3,485	3,485					400	3,000
	合計値、目標値(①以降の数値は積算後の概数)	277,017	277,017	3,000	13,500	800	1,000	400	3,000

3章 中心市街地の活性化の目標

調査地点番号	調査地点	(4-iii)	(4-iv)	(4-v)	(4-vi)	⑤	⑥	⑦	平成28年 度の目標 通行量 (①～⑦ の合計)
		「熊本駅前東A地区市街地再開発事業」による共同住宅整備による増加分	「暮らしにぎわい再生事業(駅周辺地区)」による増加分	熊本合同庁舎整備等事業による増加分	熊本駅西土地区画整理事業による増加分	熊本城公園者数増により見込まれる増加分	「桜の馬場 城彩苑」入場者数により見込まれる増加分	熊本博物館入館者数増により見込まれる増加分	
1	熊本ファミリー銀行花畑支店前(スクランブル交差点)								3,162
2	県民百貨店～旧産業文化会館(スクランブル交差点)								5,561
3	旧産業文化会館～新市街(スクランブル交差点)								12,221
4	辛島公園地下駐車場連絡通路								5,344
5	③-i) バチンコプラザ前								16,686
6	通町筋・桜町周辺地区主要12地点								3,685
7	新市街郵便局前								3,756
8	皆越洋服店前								2,282
9	モアーズIIビル前								7,725
10	南日本銀行熊本営業部前								6,370
11	南酒店前								22,665
12	カリノセカンド前								29,332
13	三国屋前								118,789
	小計								4,369
14	山小屋ビル前								25,572
15	ダイエー・櫻井總本店前								31,828
16	ファインビル前								6,063
17	カリノ下通 南側入口横								13,196
18	カリノ下通 北側入口横								11,334
19	鶴屋本館西側入口横								6,415
20	ハッピービル前								29,644
21	びぶれす熊日会館前								3,416
22	長崎書店横								15,952
23	第十美創ビル前								4,024
24	坂梨カメラ前								5,514
25	並木坂(園田屋前)								6,937
26	鶴屋本館西口入口横								4,779
	肥後銀行水道町支店前								169,043
	小計								293,932
	通町筋・桜町周辺地区小計(1～26)					1,200	600	300	2,055
27	④熊本駅								1,430
28	2地点								13,885
	熊本駅前広場東口出口								700
	森都心プラザ前								200
	駅周辺地区小計(27～28)	700	200	4,100	2,000				13,885
	合計値、目標値(①以降の数値は積算後の概数)	700	200	4,100	2,000	1,200	600	300	307,817

3章 中心市街地の活性化の目標

3) 目標達成に必要な事業等の考え方

目標達成のためには、上記に掲載の中心市街地空き店舗等総合活用事業、市街地再開発関連の事業、新市街アーケードの路面改修等のハード整備による面的な回遊性の向上が有効であると考えられるが、これに誘発される市民ニーズに応えた魅力ある店舗の増加等民間活力の増進、魅力ある商店街づくり等に努めていくことが重要である。

4) フォローアップの考え方

平成 26 年度に進捗調査を実施し、状況に応じて事業の促進などの改善措置を講じる。また、計画期間満了時点で再度調査を行い、中心市街地活性化の効果的な推進を図るものとする。

具体的には、歩行者通行量は、熊本市と熊本商工会議所が毎年実施する通行量調査のデータを根拠として、それに基づき数値目標の達成状況を確認することで、通行量の推移を適確に把握するものとする。

目標 2

「城下町の魅力があふれるまち」に関する数値目標

(1) 指標の考え方

「城下町の魅力があふれるまち」に関しての指標としては、本市の城下町の歴史と伝統は、日本三名城の一つである「熊本城」が象徴的存在であることから、「熊本城」の入園者数により、施策の成果を計るものとする。

(2) 具体的な数値目標の考え方

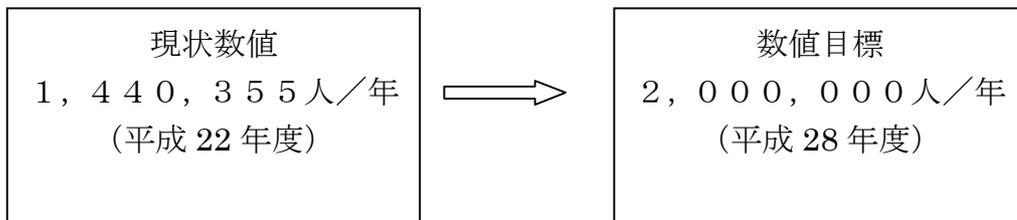
1) 熊本城入園者数

本市の「第 6 次総合計画」の分野別施策においては、本市特有の歴史や文化を生かした観光の振興を図るとして、熊本城の年間入園者数を成果指標として掲げ、平成 28 年までに 200 万人とすることを目標値として設定し、様々な施策を行っているところである。

平成 20 年度においては、本丸御殿復元事業により年間入園者数が 220 万人を超えたが、その後は減少に転じている。

そこで本計画では、新町・古町地区など城下町の風情を体感できるまちづくりや外国人観光客の誘致、さらには各種中心市街地活性化事業との連携による熊本城との回遊性の向上を図るとともに、熊本城の次なる 100 年に向けて熊本城第Ⅱ期復元整備事業を進め、新たな魅力を創出することで入園者数を増加させることとしている。

よって平成 28 年度における熊本城への年間入園者数 2,000,000 人を数値目標とする。



2) 数値目標設定の考え方

熊本城入園者数については、本丸御殿復元事業の効果により平成 20 年度の 220 万人をピークに減少に転じているものの、平成 23 年度上半期の入園者は、前年同月比で 9.4% 増の約 80 万人となるなど、安定した入園者数を確保しているところである。これは、築城 400 年を機に春夏秋冬、季節に応じた「くまもとお城祭り」の開催に加え、「名月鑑賞の夕べ」や熊本城本丸御殿催事「春の宴」、「秋夜の宴」といった夜間開園によるイベントなど多様な催しものが行われており、訪れた観光客はもとより市民の憩いの場所として年間を通して賑わいを見せていることがあげられる。さらには、熊本城の復元費用を募るために始めた一口城主制度を活用し、城主限定の施設入園券や特典が詰まった「城下町散策手形」引換券、城主限定の「宝探し」などの案内を送付することで、リピーターの確保に努めているためである。

このようなことから入園者数のトレンドとしては、今後も多少の変動はあるものの現在の水準を維持し、年間 140~160 万人の間で推移すると考えられるため、「横ばい」とし

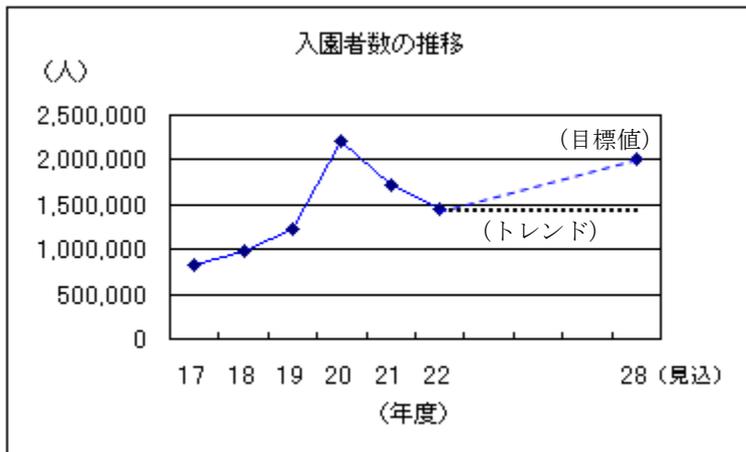
3章 中心市街地の活性化の目標

て設定する。

また、数値目標の設定にあたっては、本基本計画の施策のうち、熊本城第Ⅱ期復元整備事業による新たな効果や海外に向けたプロモーション活動の展開、平成23年3月熊本城域内にオープンした観光文化交流施設「桜の馬場 城彩苑」による効果等を勘案した。

熊本城入園者数のトレンド

年度（平成）	17	18	19	20	21	22
入園者数（人）	825,807	988,434	1,228,268	2,219,517	1,710,201	1,440,355
前年比（%）	-	120%	124%	181%	77%	84%



（資料）市勢概要

① 熊本城第Ⅱ期復元整備事業による増加 51,000人

平成29年度を目処に、御幸坂から見た往時の熊本城の復元整備を図るために、「馬具櫓一帯」、「平左衛門丸の堀」、「西櫓御門及び百間櫓一帯」の区域の整備を進めることとしている。

このうち平成24年に着手が予定されている馬具櫓は、高さ約7.2mの木造平屋で床面積は約130㎡、江戸期の絵図や明治初期の写真、史料などに基づき、全て江戸時代当時の建物を忠実に再現、高さ約2mの続堀も木造で整備する。

加えて、熊本城に隣接した新町・古町地区は、「一町一寺」という城下町特有の町割りが現存する風情ある町並みや歴史的建造物が残る地区で、現在、それらの地域資源を活かしたまちづくりを地元住民が主体となって進めている。たとえば、この地区を訪れる人が気軽に立ち寄ることができる「まちの駅」の設置や、地区の名所を地元ボランティアが案内する「町案内人」の養成などである。また今後は、それら地元住民による「おもてなしの案内」を継続的に行うことはもとより、往時の姿を残す町屋の保存活用と街並みルールづくりに取り組むことで城下町の風情を感じる街並みづくりを進めるなど、当地区を訪れる人が城下町の風情を体感しながらゆっくり散策でき、さらには熊本城との回遊性を高められるような取り組みを、地元住民と行政が協働で進めているところである。

こうした取り組みにより、熊本城復元事業の効果が一過性に終わることなく持続可能なものとなる仕組みとなっている。

3章 中心市街地の活性化の目標

今回の数値目標の設定にあたっては、平成16年に復元した飯田丸五階櫓の熊本城入園者数の押し上げ効果が約10%であったと考えられることから、復元規模（床面積比で約35.7%）を考慮に入れて、3.57%の押し上げ効果を見込み、約51,000人の入園者の増加を見込むものとする。

【積算】 1,440,355人(平成22年入園者数)×0.0357=51,420≒51,000人



飯田丸五階櫓



熊本城第Ⅱ期復元整備事業

② 海外に向けたプロモーション活動の展開による外国人観光客の増加 43,000人

本市の「第6次総合計画」では、「観光立市くまもと」の実現に向けて、国際観光客の誘致や経済波及効果の高い観光やコンベンションの振興を図ることとしており、海外、特に東アジア地域との交流、連携、情報発信などを戦略的に進め、東アジアから選ばれる都市となることを目的に「熊本市東アジア戦略」（平成22年3月）を策定して、「東アジアに熊本市の存在感を示す都市ブランドの確立と観光振興・コンベンションの誘致」をチャレンジの1つとして掲げて取り組みを進めているところである。

そこで、海外に向けたプロモーション活動の一環として、近隣国であり本市を訪れる外国人観光客のうち上位を占める韓国、中国、台湾を主なターゲットとして、各国・地域の観光展等へ出展し、熊本城を始めとする本市の魅力を阿蘇や天草の大自然や温泉とともに紹介し、外国人観光客の誘致を図っている。

特に、本市を訪れる外国人観光客のトップである韓国については、人気のあるブロガー（ブログを書いて公開している人）等を招請して熊本市の魅力を紹介してもらうなど新たな取り組みを進めている。

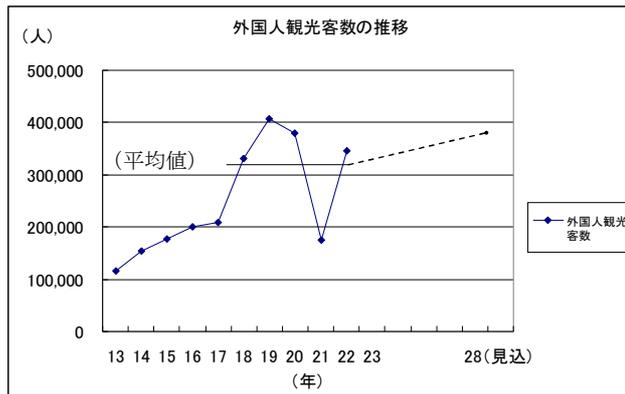
また、中国では熊本など九州の観光情報を紹介する季刊誌「南国風」が上海市で創刊され、九州新幹線や「桜の馬場 城彩苑」のほか馬刺しや熊本ラーメン、水資源の豊かさなどが紹介されており、今後、開設の準備が進む上海事務所と連携して、観光情報の発信を行うなど、観光客誘致の取り組みを強化している。

3章 中心市街地の活性化の目標

外国人観光客のトレンド

年（平成）	13	14	15	16	17	18
外客数（人）	116,287	154,751	177,645	200,736	208,146	331,889
前年比（%）	-	133%	115%	113%	104%	159%

年（平成）	19	20	21	22	28(見込)
外客数（人）	406,757	379,675	175,425	346,788	389,861
前年比（%）	123%	93%	46%	198%	-



(資料) 熊本市観光統計

外国人観光客数の過去のトレンドを見ると、平成18年から21年は本丸御殿復元の効果で大幅に増加し、平成21年にはインフルエンザの影響で大きく減少したものの、翌平成22年には概ねV字回復している。その後、平成23年3月の東日本大震災の影響等により一時的に大きく減少が見られているが、次第に回復に向かっていているところである。

よって、トレンドについては、ハード、ソフトの取り組みにより増加傾向にあるものの変動幅が大きいことや震災等の影響を加味して、平成17年から平成22年までの平均値を基準値としたうえで、平成23年以降を年4%（平成17年度の前年比）の増加があるものとして見込むものとする。

このことにより、平成28年において389,861人の外国人観光客が本市を訪れることになり、平成22年より約43,000人の増加が見込まれる。外国人観光客のほとんどが熊本城を訪れるものと考えられることから、熊本城入園者数の増加は同数とする。

【積算】

308,113人(平成17年から平成22年までの外客数の平均値)×1.04⁶−346,788人(平成22年外客数) = 43,073 ≒ 43,000人

③ 「桜の馬場 城彩苑」による増加 326,000人

平成23年3月に熊本城域内に観光文化交流施設「桜の馬場 城彩苑」が新たにオープンした。城彩苑には、熊本城の歴史や文化を体感する「湧々座」と飲食・物販の「桜の小路」がメイン施設としてあり、市民はもとより県内外の観光客で連日にぎわいをみせており、開業から約7ヶ月で年間入場者数の目標である100万人に達した。

3章 中心市街地の活性化の目標

今回の数値目標の設定にあたっては、城彩苑内の施設のうち、総事業費が明らかとなっている「湧々座」及びこれに付随する施設による事業効果を、平成20年に復元し延床面積が同程度である「本丸御殿」と比較することとし、施設規模（総事業費の比較で約29.6%にあたること）及び城彩苑入場者数の内訳（「本丸御殿」入館者は全て熊本城入園者であるが、城彩苑入場者の場合は、実態調査によると熊本城入場の割合が76.5%であること）を考慮して、事業効果をその分低く積算した上で、「本丸御殿」の熊本城入園者数の押し上げ効果が約80%であったと考えられることをもとに、城彩苑の整備による押し上げ効果を見込み、約326,000人の入園者の増加を見込むものとする。

「本丸御殿」と「桜の馬場 城彩苑」の施設整備規模比較による事業効果

	延床面積	総事業費	事業効果	備考
「本丸御殿」	2,951 m ²	約54億	80%	※1
「湧々座」他	2,810 m ²	約20億	29.6%	80% (※1) × 20/54
(参考) 桜の小路	2,340 m ²	-	-	

熊本市が行った「熊本城及び桜の馬場城彩苑観光実態調査（平成23年4月29日から5月8日の連休中に実施）」

「熊本城へ行く・行ったか」

調査場所	行く・行った	行かない	全数
城彩苑	790	243	1,033
割合	76.5%	23.5%	100%

【積算】 1,440,355人(平成22年入園者数) × 0.296 × 0.765 = 326,153 ≒ 326,000人

④ 九州新幹線全線開業による増加 170,000人

JR熊本駅の乗降客数について、平成23年3月12日に全線開業となった九州新幹線による影響を対前年同月と比較すると、開業後の4月から6月までの3ヶ月間の平均で約20%増加している。開業前日の震災の影響や6月の長雨で138本が運休する中で着実に伸びており、今後もこの伸びを維持するものと考えられるため、少なくとも平成22年度一日平均20,666人/日の20%増加が見込める。

3章 中心市街地の活性化の目標

開業後 対前年同月比較 (JR 提供)

(単位：人／日)

(1)	H23. 4 月	H23. 5 月	H23. 6 月	4～6 月の平均
在来線	14, 297	14, 454	13, 312	14, 021
新幹線	11, 029	10, 417	10, 406	10, 617
合 計	25, 326	24, 871	23, 718	24, 638

(2)	H22. 4 月	H22. 5 月	H22. 6 月	4～6 月の平均
在来線のみ	20, 659	20, 935	19, 516	20, 370

(1) - (2)	4, 667	3, 936	4, 202	4, 268
増加率	22. 6%	18. 8%	21. 5%	21. 0%

また、九州新幹線熊本駅乗降客アンケート調査（平成 23 年 7 月、財団法人地域流通経済研究所）によれば、熊本駅乗降客数のうち、熊本県外の乗降客数は 54. 5%であり、このうち観光客数が 30. 3%である。さらに熊本市内への観光を目的にする人が 68. 6%であり、ほとんどが「熊本城へ行く」と答えていることから、熊本城入園者数の増加は同数とする。

【積算】

20, 666 人／日 (H22 年度 JR 熊本駅乗降客数) × 0. 2 × 0. 545 × 0. 303 × 0. 686 × 365 日
= 170, 900 ≒ 170, 000 人／年

【熊本城入園者数目標値の積算】

1, 440, 355 人 + ① + ② + ③ + ④ = 2, 030, 355

これらの積算の他に、熊本城マラソン事業などの新たな取り組みを行うこととしており、目標値は 2, 000, 000 人を見込む。

3) 目標達成に必要な事業等の考え方

熊本城復元事業には、市民を始め全国各地から多くの寄付が寄せられており、熊本城復元に対する人々の思いと期待が表れている。これまで市民協働で取り組んできた熊本城の魅力づくりが高く評価され、にぎわいのあるお城に繋がっている。

今後は、次なる 100 年に向け熊本城の歴史的な価値をさらに高めるため、第Ⅱ期復元整備事業を着実に推進し、往時の勇姿を今日に復元するとともに、熊本城奉行丸周辺ライトアップ事業、隣接の通町筋・桜町周辺地区で行うストリート・アート・プレックスや光のページェント、複数の商店街が連携して行う各種イベント等、熊本城及び周辺でのソフト事業の拡充、強化により熊本城一帯の魅力を高め、入園者の増加を図ることとする。

また、東アジアへの観光宣伝の積極的展開により海外観光客の誘致を図るとともに、

3章 中心市街地の活性化の目標

市立博物館、県立美術館、県伝統工芸館など城域及び周辺の文化施設、あるいは通町筋・桜町地区の商店街や新町・古町地区など周辺地域との連携を強化し、まち歩きを促進するなど、周辺地域との一体性と回遊性の向上を図り、歩行者通行量の増加にも繋げる。

さらには、お城のエントランス部にあたる「桜の馬場 城彩苑」については、認知度や駐車場不足も課題となっており、隣接する熊本合同庁舎の移転に伴い駐車場の整備を検討するなど、熊本城と一帯となった観光スポットとして定着を図って行くこととする。

4) フォローアップの考え方

平成 26 年度に進捗調査を実施し、状況に応じて事業の促進などの改善措置を講じる。また、計画期間満了時点で再度調査を行い、中心市街地活性化の効果的な推進を図るものとする。

具体的には、毎年度の熊本城入園者数に基づき数値目標の達成状況を確認するとともに、上記関連事業の進捗も併せて確認し、状況に応じて目標達成に向けた措置を講じるものとする。

【熊本城下の取り組み例】



(城下町くまもと大にぎわい市の様子)



(みずあかりの様子)

目標3

「誰もが気軽に訪れることができるまち」に関する数値目標

(1) 指標の考え方

誰もが気軽に訪れることができるまちづくりを行うことに関しての指標としては、路線バスの利用者数等も指標として考えられるが、市全域としての利用者数しか算出できず、中心市街地への影響を定量的に測定することが困難である。

一方、市電については、中心市街地内に16の電停が設けられ、利用者全体の約54%が乗降している状況にあり、また、路線が中心市街地の骨格を形成するよう配置されており（後述の市電の路線図及び乗降人員の推移表参照）より正確なデータ指標となるため、数値指標として採用するもの。

なお、この数値については、本市交通事業者が自ら調査を行っており、フォローアップが可能である。

市電電停別乗降人員の推移

(単位：人)

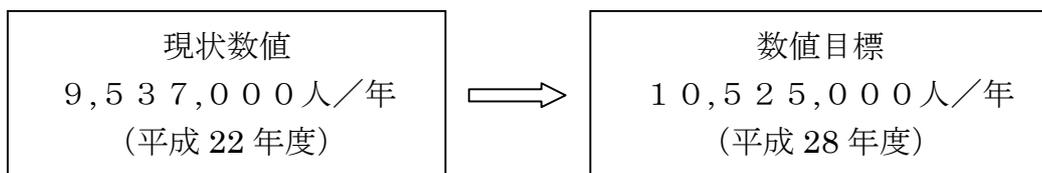
年度（平成）	11	13	16	19	22
中心市街地エリア内16電停の合計	30,365	30,444	27,180	26,481	27,153
市電全体	56,550	56,322	50,080	48,548	50,756
中心市街地エリアの割合	53.70%	54.05%	54.27%	54.55%	53.50%

※熊本市交通局調査より（2～3年毎に10月の平日（木）の1日だけ各電停ごとに調査を実施）

(2) 具体的な数値目標の考え方

1) 市電の利用者数

九州新幹線全線開業による効果や新たに実施する市電の電停改良事業、さらには公共交通の利便性向上による効果等を見込み、平成28年度の市電の年間利用者数の目標は、10,525,000人とする。

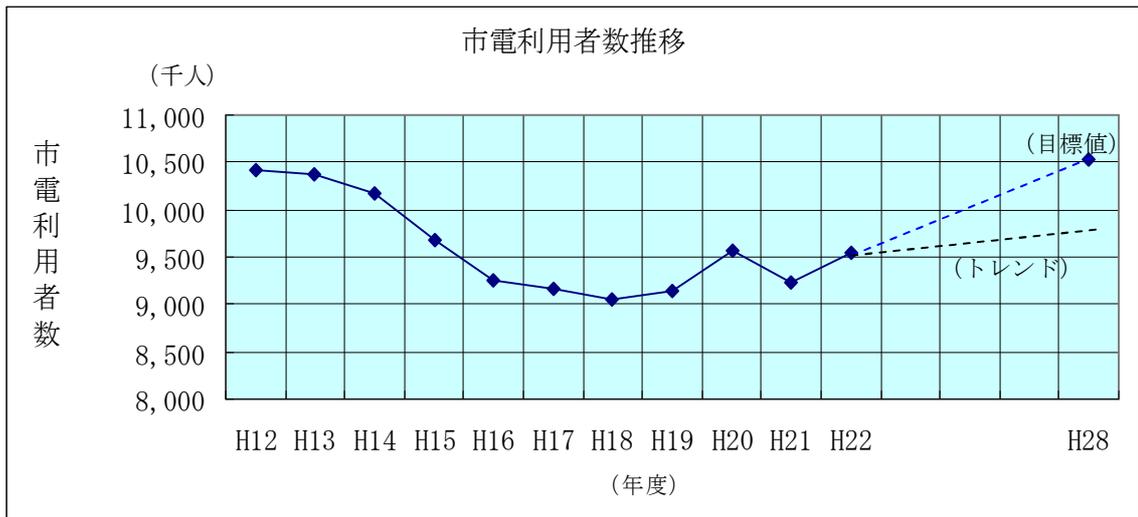


3章 中心市街地の活性化の目標

2) 数値目標設定の考え方

本基本計画の施策のうち、新たに実施する市電電停改良事業の他、各施策展開によるにぎわい創出や公共交通利便性向上、九州新幹線全線開業の効果等から、市電の利用者数を設定した。なお、この数値は、利用者の減少に歯止めがかかってきた平成17年からの利用者数のトレンドを加味するものとする。

市電の利用者数の動向と数値目標



① 利用者数のトレンド 9,826,000人

平成22年度の利用者数について、5年前からの推移を見ると、平均で毎年0.5%ほど伸びている。今後も利便性の向上に向けた利用促進事業の実施等により同様に利用者の増加が続くものと推測される。利用者数を予測すると平成28年度には9,826,000人となる。

(単位：千人)

年度(平成)	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	28
利用者数	10,418	10,366	10,182	9,690	9,249	9,160	9,053	9,135	9,568	9,241	9,537	9,826
前年比(%)	-	99.5	98.2	95.2	95.4	99.0	98.8	100.9	104.7	96.6	103.2	-

【積算】 $9,537,000$ (平成22年度利用者数) $\times 1.005^6 = 9,826,000$ 人

3章 中心市街地の活性化の目標

② 利用者数の増加見込み 699,000 人 i) 378,000+ ii) 66,000+ iii) 117,000
+ iv) 138,000

i) 九州新幹線全線開業による増加 378,000 人

JR 熊本駅の乗降客数については、平成 10 年度に一日平均で 24,520 人であり、平成 21 年度には 20,006 人となり、毎年減少傾向にあったが、平成 22 年度には年度末に新幹線効果も加わり 20,666 人/日という結果となった。この間、平成 20 年度には本丸御殿完成の影響により普通旅客が一時的に増加、熊本駅周辺の整備が進むにつれ、通学や通勤定期利用者が微増傾向にある。

開業後 対前年同月比較 (JR 提供) (単位: 人/日)

(1)	H23. 4 月	H23. 5 月	H23. 6 月	4~6 月の平均
在来線	14,297	14,454	13,312	14,021
新幹線	11,029	10,417	10,406	10,617
合 計	25,326	24,871	23,718	24,638

(2)	H22. 4 月	H22. 5 月	H22. 6 月	4~6 月の平均
在来線のみ	20,659	20,935	19,516	20,370

(1) - (2)	4,667	3,936	4,202	4,268
増加率	22.6%	18.8%	21.5%	21.0%

JR 熊本駅の乗降客数について、平成 23 年 3 月 12 日に全線開業となった九州新幹線による影響を対前年同月と比較すると、開業後の 4 月から 6 月までの 3 ヶ月間の平均で約 20%増加している。開業前日の震災の影響や 6 月の長雨で 138 本が運休する中で着実に伸びており、今後もこの伸びを維持するものと考えられるため、少なくとも平成 22 年度一日平均 20,666 人/日の 20%増加が見込める。また、熊本駅で市電に乗り換える乗客の割合は 25.1% (熊本駅周辺整備基本計画資料編 (H17 年 6 月) における実態調査) であることをもとに、熊本駅電停での市電利用者の増加数については、378,000 人/年を見込むものとする。

【積算】

$20,666 \text{ 人/日} \times \text{H22 年度 JR 熊本駅乗降客数} \times 0.2 \times 0.251 \times 365 \text{ 日} = 378,663$
 $\approx 378,000 \text{ 人/年}$

ii) 拠点施設等整備効果による増加 66,000 人

平成 10 年の「熊本市中心市街地来街者意識調査」によると、中心部へ訪れる人の来街手段の市電の割合は 13%となっている。平成 23 年 10 月完成の情報交流施設 (熊本駅前東 A 地区市街地再開発事業) への来館者については、506,000 人/年 (P52、表 5

3章 中心市街地の活性化の目標

参照)を見込んでおり、来館者の市電利用者数については、調査をもとに 66,000 人／年を見込むものとする。

【積算】

$$506,000 \text{ 人／年} \times 0.13 = 65,780 \text{ 人} \div 66,000 \text{ 人／年}$$

iii) 中心市街地での歩行者通行量による増加 117,000 人

平成 14 年度に通町筋周辺地区で実施された再開発で、その前後の年度を比較して歩行者通行量が 13%増加 (P50、表 3 参照) している。市街地再開発事業 (花畑地区) の完了により同地区の電停付近の歩行者通行量の増加を来街者の増加と捉え、平成 10 年の「熊本市中心市街地来街者意識調査」(中心部へ訪れる人の来街手段の市電の割合は 13%) をもとに市電利用者の増加を 117,000 人見込むものとする。(位置については前述の商店街歩行者通行量調査地点図参照)

電停名	No.	調査地点	平成 22 年度 歩行者通行量 (人／日)
辛島町	2	県民百貨店～旧産業文化会館	4,921
辛島町	5	パチンコプラザ前	14,766
合 計			19,687

【積算】 $19,000 \text{ 人／日} \times 0.13 \times 0.13 \times 365 \text{ 日} = 117,201 \div 117,000 \text{ 人／年}$

※ No.3 の調査地点は、スクランブル交差点であり、No.2、No.5 とダブルカウントする可能性が高いので採用しないものとする。

iv) 市電の利便性向上による増加 138,000 人

- ・ J R 新水前寺駅結節強化による増加の見込み

J R 新水前寺駅における J R 豊肥本線と市電の結節強化に向けた交通結節点整備 (平成 23 年度完成) による市電の利用者の増加について、熊本市交通局が策定した交通事業経営健全化計画 (H22.3 月策定) により、市電の新水前寺駅前電停での利用者数が 10%増加するとされていることをもとに、105,000 人／年の増加を見込む。

なお、市電新水前寺駅前の乗降客数の推移については、J R 新水前寺駅結節前の平成 23 年 7 月調査によれば、一日平均 3,027 人で、結節後の 10 月では、3,479 人であり、452 人／日 (14.9%) 増という結果となっており、想定の事業効果が見込まれる。

【積算】

$$2,900 \text{ 人／日 (H22 年度 新水前寺電停市電利用者数)} \times 0.1 \times 365 \text{ 日} = 105,850 \text{ 人／年} \div 105,000 \text{ 人／年}$$

- ・ 市電電停改良による増加

都市マスタープラン (平成 21 年 3 月改定) の中で、公共交通機関の利用促進のための交通網の整備方針として、誰もが利用しやすい施設整備に努めることとしており、電停のバリアフリー化を進めている。

平成 28 年までに改良計画がある電停の利用者数のうち老年人口の割合は約

3章 中心市街地の活性化の目標

31%（H21年度交通計画調査）である。また、高齢人口の今後（H22～27年度）の推移見込みは3%増（熊本市第6次総合計画）となっており、これを利用者数（バリアフリー化により新たに市電利用が促進される人数）の増加と捉え、33,000人／年の増加を見込む。

【積算】

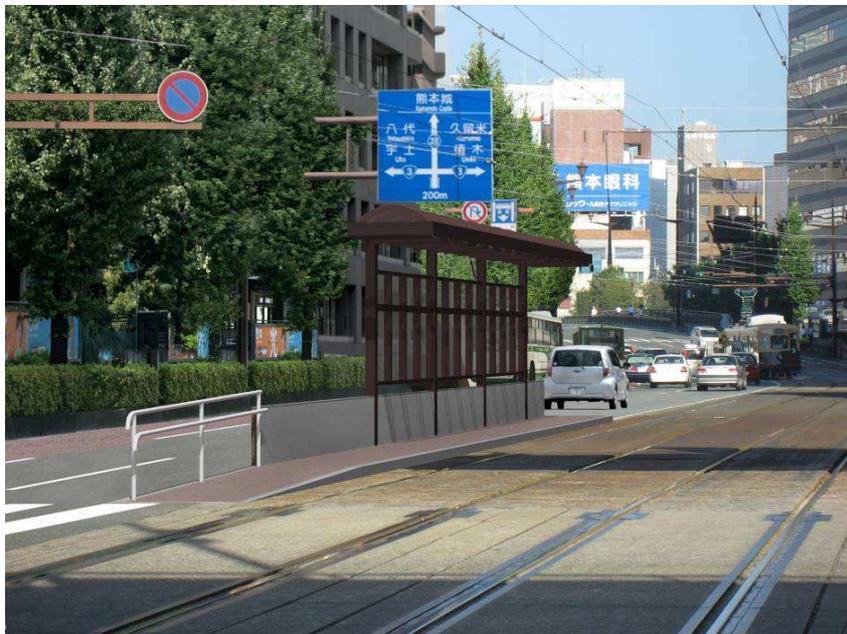
10,000人／日（H22年度利用者数）×0.31×0.03×365日＝33,945≒33,000人／日

平成28年度までに改良計画がある市電電停

電停名称	H22年度利用者数（人／日）	整備予定年度
九品寺交差点電停	1,406	H22～H23
神水・市民病院前電停	1,563	H23～H27
熊本城・市役所前電停※	1,905	H24～H25
通町筋電停※	5,732	H24～H27
杉塘電停	149	H23～H28
合計	10,755	—

※：中心市街地にある電停

完成イメージ図



【市電利用者数目標値の積算】

①+②＝9,826,000＋699,000＝10,525,000人

これらの積算の他に、市電ロケーションシステム導入事業などの新たな取り組みを行うこととしており、目標値は10,525,000人を見込む。

3章 中心市街地の活性化の目標

3) 目標達成に必要な事業等の考え方

目標達成に関しては、市街地再開発事業（花畑地区）を予定どおり完了させるとともに、電停改良等公共交通の利便性向上を図り、加えて中心市街地の魅力アップを図っていくことが重要である。

4) フォローアップの考え方

平成 26 年度に進捗調査を実施し、状況に応じて事業の促進などの改善措置を講じる。また、計画期間満了時点で再度調査を行い、中心市街地活性化の効果的な推進を図るものとする。

具体的には、市電の利用者数は、本市交通局が実施する調査データを根拠としており、それに基づき数値目標の達成状況を確認し、状況に応じて目標達成に向けた措置を講じるものとする。

(参考) 市電の路線図

